

長い年月が必要であったということから、このことは Davy の考えが当時、如何に進んでいたかを示すものである。

5)「看護教程草案(救護看護婦用)」
第一巻(昭和17年4月刊)について
の第3報

The Prepared. Textbooks, Science of Nursing. (for Rescue Work Nurse) I the 3'rd Report

池園歯科研究会 ○植木 清二
湯浅 高之
小林一日出
飯沢 義久
荒井 照夫
日本歯科大学 屋代 正幸

Seiji Ueki, Takayuki Yuasa, Kazuhide Kobayashi, Yoshihisa Iibuchi, Teruo Arai, Ikezono dental research group
Masayuki Yashiro, Nippon Dental University

表題本の内容のうち、第六編、看護の中より第八章「歯科看護」の教程内容を抜粋し、現在の看護学で講述されている内容とを、比較検討した。

第一口腔衛生

第二口腔清掃法

其一洗漱法

其二器械的清掃法

其三洗滌法

第三歯牙ニ對スル飲食物ノ注意

第四妊娠ト口腔衛生

第五乳齒ノ注意

第六歯牙交換期ノ注意

これらの内容は、口腔衛生の概念や口腔清掃法の概論、あるいは飲食物や妊娠時の注意、またあるいは、歯牙交換期の注意などがばく然として述べられており、実際に歯科診療を受診する患者に接し、臨床上現実にせねばならない歯科看護の具体的内容には触れられていない。

これは前述した如く、本書が医師の主幹によってまとめられたものと推察される。

すなわち、当時の医学界は明治以来歴史的な医師・歯科医師二元論的教育がなされ、医師教育に対してはほとんど歯科医学内容が含まれず、かつ看護婦という医療補助者は、もっぱら医師側に立脚した教育によってなりたっていた結果と思われる。

しかしながら、内容が浅薄といえども、口腔衛生あるいは予防歯科の立場からの教授内容が見てとれることは喜ばしい事実である。

6)「看護教程草案(救護看護婦用)」
第一巻(昭和17年4月刊)について
の補遺

The Prepared Textbooks, Science of Nursing. (for Rescue Work Nurse) I Complementary Report

池園歯科研究会 ○湯浅 高之
植木 清二
藤野 瑠男
斎藤 憲一
西村 好一
日本歯科大学 屋代 正幸

Takayuki Yuasa, Seiji Ueki, Yoshio Fujino, Kenichi Saito, Koichi Nishimura, Ikezono dental research group
Masayuki Yashiro, Nippon Dental University

第15回日本歯科医史学会総会において、演者らの発表内容に対して、日本赤十字大学図書館よりその内容の訂正と追加資料をいただいた。ここに感謝して改めてその補遺を述べたい。

表題書籍の内容発表にさいし、その初版発刊年月日と、その後の改版および絶版に至るまでの経緯を日本赤十字大学図書館司書、吉川龍子氏に確認をした。

昭和62年10月2日の大会発表後、講演抄録を吉川氏にお送りしたところ、訂正の手紙をいただく

た。

その内容要旨

1) 日赤の看護婦を「救護看護婦」とよびだしたのは、明治末からで、戦時救護のみでなく、災害救護をも目的としている。(むしろ災害救護の意味あいの方が強い)

2) 本書は、戦時用ではなく、本書以前にあった「甲種看護教程」を受けついで、長い準備の上で成立したものである。

この資料として、『日本赤十字中央女子短期大学90年史』(昭和55年刊)の「看護教程草案(救護看護婦用)」編纂の項を示す。

「看護教程草案(救護看護婦用)」編纂昭和7年(1932)12月20日、日本赤十字社救護員教科書編纂委員会規程を改めて制定。昭和8年(1933)6月16日、日本赤十字社「甲種看護教程」を根本的改纂。

この時の委員構成としては

会長 日赤病院長 藤波 正

委員 日赤副院長 井保健次

治療主幹

薬剤主幹

事務主幹

ら以下17名にて構成さる。

同年より昭和11年(1936)まで編纂委員会がもたれ、昭和12年(1937)4月15日に「看護教程草案(救護看護婦用)」第一巻～第三巻が博愛発行所より刊行せられた。

昭和18年(1943)まで改版が行われた。

以上、上記のように本書の成立した背景を示し、補足する。

7) パライト氏撰書 小林義直訳述 歯科提要初版について

On the First Edition of “The Gist of
Dentistry” On J. Parraidt’s Translated by
Yoshinao Kobayashi

日本大学松戸歯学部 ○吉村 宅弘

米長 悦也

松本 好正

谷津 三雄

医歯薬出版株式会社 今田 喬士

Takuhiko Yoshimura, Etsuya Yonenaga,
Yoshimasa Matsumoto, Mitsuo Yatsu, Nihon
University School of Dentistry at Matsudo
Takashi Imada, Ishiyaku Shuppan Pub.

日本歯科医師会編『歯科医事衛生史』前巻(昭和15年10月刊)の93ページに「初期に於ては歯科専門の出版書なく、伊澤道盛の『固歯草』、伊澤が松川修に託して訳させた『タフト歯科治術学』、メレデイス『歯科治術学』並に桐村克己が師説を奉じて著した『歯の養生』、高山紀斎の『保歯新論』等であって、明治22年に至って小幡門下の客員たりし小林義直の訳した『パライト歯科提要』等が金科玉条として尊重された。其以前の門下生は師の小幡、先輩桐村克己のノートブックを供覧して学んだのである」と記され、また、同誌546ページの歯科図書に「歯科提要(上・下)小林義直、明治22年12月刊パライトの著書を訳述したもので原著の意を伝えて秩序正しく、訳筆之に適し、当時有数の著述で大いに歯科学生に裨益した」と記し、小林義直訳述『歯科提要』を高く評価している。また演者らの一人谷津はその著『歯学史資料図鑑、増補改定版』(昭和55年5月刊)で小林義直の人物史について井上角五郎編『小林先生小伝』をもとに「語学は蘭学より入りて英書に衛生局辞職後(すなわち明治13年9月20日)病間ドイツ語を攻む。其著訳中『歯科提要』は之を実にドイツの原著によるという」と記されていることから『歯科提要』は病床にありながらの訳本であると考証している。本書の初版は明治22年12